キリシタンの受難のはじまり：豊臣秀吉から徳川幕府初期まで

豊臣秀吉と伴天連追放令

日本におけるキリスト教の宣教は、1549年のイエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルの来日とともに始まりました。この新しい宗教は急激に広がりましたが、当時日本統一に向けて戦っていた豊臣秀吉は、1587年、前触れなくキリスト教の神父の追放令（伴天連追放令）を發布し、キリスト教の信仰を禁止しました。1588年には、大村純忠とその息子大村喜前および有馬晴信がイエズス会に寄進していた長崎・茂木・浦上を直轄領としました。

1596年のスペイン船サン・フェリーペ号の漂着により、キリスト教の布教は武力による侵略の布石であるという噂がたち、これを発端として、1597年2月、秀吉はカトリック信徒26名を長崎の西坂で処刑しました（この事件は日本二十六聖人の殉教として知られており、処刑された信徒の中にはフランシスコ会とイエズス会の宣教師や信徒がいました）。しかし、秀吉はヨーロッパとの貿易を継続するのに積極的だったため、この禁教令は不徹底なものとなり、禁教後も宣教活動は続けられました。

徳川幕府と禁教令

秀吉は1598年に没しました。1603年に江戸幕府を開いた、秀吉の後継者である徳川家康も、当初は秀吉と同様貿易のためにキリスト教を容認しました。その結果、日本のキリスト教信徒数は増加し続け、最も多い時期には30万人以上の信徒がいました。

1610年1月の有馬晴信によるポルトガル船ノサ・セニョーラ・ダ・グラサ号への攻撃や、その結果起こった1612年のキリシタン大名をめぐる陰謀（岡本大八事件など）を契機として、1605年に引退した徳川家康の後を継いだ二代将軍秀忠は、キリスト教をより深刻にとらえるようになりました。1612年、秀忠は幕府の直轄領である江戸や京都等に禁教令を發布し、その後1614年には日本全国でキリスト教の信仰を禁じました。こうして日本のキリスト教信徒は、キリスト教が解禁される約260年後まで続く受難の時代に突入しました。

キャプション

図 1

大村純忠は最初のキリシタン大名だった。長崎開港を許可し、1571年にポルトガル船2隻が入港した。
カルデイル『日本殉教精華』1646年初版・1650年刊より
（長崎歴史文化博物館）

図 2

1597年に長崎の西坂で殉教した日本二十六聖人。殉教者たちは1862年に列聖された。
《日本の殉教者たち》1628年
（長崎歴史文化博物館）

図 3

イエズス会の宣教師（左の黒衣の人物）とフランシスコ会の宣教師（右の灰色の衣の人物）の姿。

狩野内膳《南蛮屏風》部分

桃山時代（1573－1615）

重要文化財

（神戸市立博物館蔵）